

クリちゃん動物園散歩(三)

根本進

二十年前にはじめてヨーロッパ旅行をした時、動物園は西ベルリンで一つだけ見ました。新しいアクアリウムが出来て間もないころだったと思います。その旅行では美術館めぐりが目標のスケジュールだったので、同行の先輩N氏に黙ってここへ連れて行かれた時は、建物のデザインでも見物するために来たのだらうぐらいに思いました。

大きな水槽にいる海の魚にも大して感心せず「日本にもこの位の水族館はありそうだな……」と言うと、「ここをどこだと思ってるんだ。ベルリンが海からどの位離れた所か考えてみる。日本なら信州の松本の辺りへ太平洋の海の魚を運んでいるんだぞ」とN氏に叱られました。なるほどドイツ人のやる事は大したものだと、それでやっと知ったものでした。

三階には虫の展示セクションがあつて、日本の昆虫……そ

れがクモか、アリか、それとも他の何であつたか、ハッキリ覚えていないのが残念ですが、要するにそのくらいまだ、生きものの貴重さも展示の面白さもわからず、関心が薄かつたことだけは確かの様です。

水族館で思い出すのはデンマークの首都コペンハーゲンの郊外にあるシャロッテンランドの水族館です。その前から動物園がだんだん面白くなってきて、三度目の外国旅行では動物園散歩が第一目標の様になつて方々を廻りました。そして毎日毎日動物園ばかりでは変化が乏しいので、少し様子の違う水族館もないかと土地の人にきいて出かけたのがここでした。

電車で一時間半位、降りてから二〇分位歩いて行きついた所は、ひっそりとした林の中でした。入口を入ると水槽の数

は少なく、お客も私のほかに二、三人だけ。拍子抜けした気持ちで、「まあ、今日はくたびれ休みのつもりで、ここでゆっくりしよう」と思ったら、部屋の真中に一息するのにも都合のよい椅子がありました。そこへ腰をかけて見ていると、全く落着いて水槽の中がよく見えます。水辺の草や、水の中に倒れた朽木の様子など、自然のままの様子を美事に再現しています。

美しい海水魚ばかりでなく、一見平凡そうな淡水魚が、ゆっくり見ていると意外に見ごたえがあります。それからアフリカにいるツメガエルだったと思いますが、のっぺりしたひょうきんな顔をした蛙が、深く暗緑色をした水底から浮き上ってきては、空気を吸って、また潜って行く格好はユーモラスで愉快でした。

もっと驚いたのは、林の木の間をくぐって指し込む、太陽の光線を感じ出した照明が、水の中まで届き、それが全く日光の様に少しずつ動いているのです。他のお客も三十分ぐらい無言で椅子に腰かけています。つまり、こんな風にごく急がずにゆっくり味わうように出来ているのです。

そのころ日本の水族館といえば人出の多い場所であって、しかもなるべく沢山の人が入るように作ってありました。団

体が太急ぎで賑やかにただ素通りすることも少なくありません。水槽の数が沢山あると、見る方はよく見なくても、数を見たことで気がすむそんな所が多かったので、私には、この水族館の静かな印象は新鮮で強烈でした。

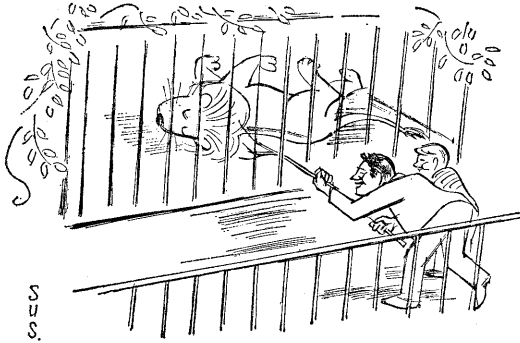
後で、有名なフランクフルト動物園の中にあるエキゾチックウムというのを見ましたが、ここでは皇帝ペンギンのいる所が、上手に冰山と海のムードを出したりしていて、やはりお客が椅子に腰かけてゆっくり出来るようになってきていました。確かここだけ夜十時ごろまで開いていると聞きました。

動物園をいくつか見ている中に、珍しい動物の貴重さがわかってきたり、同じ動物を見ても国が違うと、お客の見るムードが違って、なるほどこれがそれぞれのお国ぶりなんだなあと思う様になりました。

イギリス、ドイツ、スイスの動物園は、檻などもよく整備されていて清潔です。特にドイツでは動物についての説明がくわしく書いてあります。一般名、学名、生息分布の地図、そして生態についての解説など、いかにも正確さを誇っているようです。見物客も父親がこれを読んで、地図を指さしながら子どもに教育をしている感じでした。そのお父さんの服装

は日曜日でも帽子をちゃんとかぶり、ズボンの折り目も正しい人ばかり。

フランス人（といってもパリだけしか見ていませんが）になると、帽子をかぶる父親は少なくて、道順、番号、説明板などは気にせず、散歩している様です。夫婦が手をつなぎ、四五歳以上の子どもは両親から離れてブラブラ歩いています。



子どもたちだけ集まって来るのを見て、学校からの見学団体かと思ったりしましたが、それにしても服装はまちまちで、人数も少なく、賑やかなので聞いてみたら、団地、アパートなどでアルバイトの高校生、大学生を休日などに雇って、案内や面倒を見てもらう例が多いそうです。子どもたちもその方が両親と来るより気楽とみえて、いろいろな質問をこのお兄さんに浴びせて困らせたりして愉快そうでした。

スペインでは子煩悩というか、小さい子どもをとてても大事にする風習があるのか、公園の一角に母親と赤ちゃんが安全に過せる場所が区切られていたり、動物園でも手をつなぎ、だっこする親が多い気がしました。

面白いのはイタリヤで、いたずら小僧が目立ちます。ローマのボルゲゼ公園の中には、古くなっていますが大きな動物園があります。その動物園で、柵を越えてライオンの檻に近づいて、木の枝で、昼寝中のライオンをつついてからかっている男の子がいました。私は歩きながら遠くからそれを見て「あれ、れ」と思っていると、私の後から父親が大急ぎでそこへ近づいて、息子から小枝を取り上げたと思ったら、自分もやりたくなったらしく、つついていたのにはあきれました。

(漫画家)